

作動グループと基底的想定グループ
～その理論と実践～

Work Group and Basic Assumption Group:
A theoretical and empirical consideration

黒 崎 優 美

要 約

本稿の目的は、Wilfred Bionの集団理論に基づいて精神分析志向のT-group (D-group) 体験とそれに伴う現象を検討し、具体的な臨床的資料を提示しながら、グループの発達を阻む現象とその構造を明らかにすることである。

集団心理を扱う研究分野に対してBionは多大な貢献を果たしているが、一方でその高度に抽象化された文体と、具体的な資料の提示や詳細な解説の不足のために、理解が困難であったり、また誤解され易い一面を併せ持っている。そこで今回は特に、彼の集団理論の中核を成す「作動グループ」及び「基底的想定グループ」理論に焦点を当て、1グループが体験した全6セッションを順に追いながら、特徴的な場面と共に、そこに現れている作動グループ、及びそれを妨害する基底的想定グループの様子をできるだけ詳しく解説するよう試みた。本稿がBion概念のより明確な理解と共に、D-groupを行う際の技法理解のためにも役立つものであればと思う。

作動グループと基底的想定グループ

～その理論と実践～

BionはロンドンのTavistock Clinicにおける治療グループの経験に基づいて、優れた集団理論を生み出した精神分析家である。初めて精神的な視点で集団に言及したのはFreud (1921)であったが、Bion (1961)は更にKlein (1946, 1959)の防衛機制理論、特に「妄想・分裂の態勢」及び「抑うつ態勢」における、否認、分裂、理想化、投影同一化、羨望、罪悪感等の機制を集団に応用しながら、独自の集団理論を発展させた。それではこれから簡単にその一部を紹介しよう。

Bion (1973)によれば、「すべての集団は、偶然であるかもしれないが、何かを“為す”ために相会する」(p.137)。言い換えれば、全てのグループにはその規模や構造に関わらず、メンバーがそのために集まるような基本的な作業が伴う。ところがどのようなグループでも、常にその作業遂行のために必要な活動のみを行ってはいない。そのことは、誰でも自分自身の所属するグループについて思い出してみれば納得する事実であろう。このようにグループには常にとり得る2種類の状態があり、その内どちらかが支配的である。それ等をBionは「作動グループ」及び「基底的想定グループ」と名付けた。

作動グループ (work group)

Bion (1961)によれば、その作業に向けられたグループの活動は現実と関連を持ち、また合理的な方法を用いるものである。更にグループは経験から学び発達する能力を持つ。具体的には作業の内容や量、必要な時間についての現実的な認識、各メンバーの能力に応じた協力等の要素を持つ。「従って、いかに萌芽的な型にせよ科学的である」(1973; p.137)。Bionはこのような機能を持つグループの状態を「作動グループ」と名付けた。

但しここで用いる「グループ」という用語は、それに従事する人々のことではなく、特定の種類の精神的活動を表すものである。

基底的想定グループ (basic assumption group)

作動グループに不可欠なグループの様々な要素には苦痛が伴うため、それは「同じように強力な情緒的衝動の特性を持った、ある他の精神活動によって阻止され、回避される」(Bion, 1971; p.140)。このようなもう一つの活動が支配的なグループの状態をBion (1961) は「基底的想定グループ」と名付けた。基底的想定グループは作動グループとは対照的に、現実ではなく幻想に基づき方向付けられた方法と判断によって、それに伴う結果について考慮することなく無批判に行動を実行に移す。つまり基底的想定グループには作動グループに必要な能力の全て、即ち合理的な方法を用いたり経験から学んだりする能力が欠けている。従って作業の内容や量、必要な時間に関する現実的な認識にも乏しく、その代わりに過剰な感情的主張(不安、恐怖、憎悪、愛、好き嫌い)を用いるが、言語によるコミュニケーションは未発達で正確さと一貫性に欠ける。つまり基底的想定グループはあらゆる発達過程の欠如を伴う。作動グループに参加するグループメンバーには能力に応じた協力が必要であったが、基底的想定グループの場合は何ら努力の必要がなく、それは「即時的・不可避免的でしかも本能的なものである」(Bion, 1973; p.147)。

Bionはグループ治療の経験からそれぞれ異なる特徴を持った3種類の基底的想定の存在を明らかにし、それぞれを依存基底的想定、闘争/逃避基底的想定、つがい基底的想定と名付けた。

・依存基底的想定 (basic assumption of dependency)

Bionによれば、依存基底的想定(以下baD)において「集団は、物質的・精神的な援助や保護のために依存しているリーダーに支持を得ようとして

会合する」(1973; p.141) という雰囲気と共有している。従ってグループは、リーダーだけが全知全能であり、グループ自身は未熟で助けを必要とする無力な存在、故に自身では何もできない「かの様に」振る舞う。またメンバー間には繋がりが感じられず、メンバーそれぞれがリーダーとの独占的な関係を持つという信念を抱いている。グループはリーダーに対し、極端にどん欲で決して満たされないような方法で援助や問題の解決策を得ようと試みるので、結局リーダーがグループの要求と期待に応えることが不可能であるということになるが、その時はグループはそのリーダーを諦め、今度こそ完璧にグループの面倒をみてくれるような新しいリーダーを探すという試みを繰り返す。baDグループのリーダーは一人のメンバー、或いはトレーナーであるかも知れないし、或いはグループによって記録されたグループの歴史(聖書)のようなものであるかも知れない。例えばリーダーが、依存できるというグループの要求に沿わないと判断されれば、グループはこの聖書に訴えリーダーに圧力をかけるためにこれを利用するだろう。

baDはBion(1961)が「baDの二面性」(dual of baD)と名付けたもう一つの側面を併せ持つ。それは、グループが最も症状の重いメンバーをリーダーとして選び、その面倒をみるという状況である。baDグループには依存する人と依存される人の存在が必要であり、この場合グループは依存する人を自ら作り出した上でその存在に一体化し、baDグループとしての機能を果たしているものと考えられる。

・闘争/逃避基底的想定 (basic assumption of fight/flight)

闘争と逃避は正反対の異なる種類の反応である、と一般的には理解されているが、Bion(1961)はそれらを1枚のコインの裏表のように、同じ基底的想定の違った側面として理解した。

baFグループはその存続にとって脅威であると感じられる(幻想的な)

グループ内（外）の誰か、或いは何か（敵）と闘うか、もしくはその幻想的な敵から逃れるために集まっている「かのように」振る舞う。baFグループには言語的闘争（疑念、非難等）、或いはより消極的な抵抗の現れとしての長い沈黙、またはグループの作業と無関係な事柄に没頭することによる作業からの逃避、いずれかの雰囲気支配的である。またグループとして敵を意識し、その敵と闘ったり或いはそこから逃げたりするためには、個人よりもグループという単位が重視されるというのもbaFグループの特徴である。

baFグループのリーダーには、漠然と感じられる（幻想的な）外部、或いは内部の敵と闘うか、もしくはその敵から逃げるようグループを動員し、指示を与える能力を持つ者が求められ、選ばれる。グループはリーダーが危険や敵を認知し、見当たらなければそれを作り出すことさえ期待する。このようなグループの期待に応えることのできないリーダーは無視され、より相応しい者に取って代わられる。

尚、本稿においては便宜上、Stock & Thelen (1958)、Armeliu & Armeliu (1982) やHafsi (1997) の提案を採用し、「闘争」(以下baF) と「逃避」(以下baFl) を別々に扱うこととした。よって後に挙げる例においてそれ等を二つの別々の場面として扱っているが、その内容からは、やはりそれ等は同じ対象に対する単に異なる反応の仕方ではないということが理解されるだろう。

・つがい基底的想定 (basic assumption of pairing)

Bionが用いたpairing (つがい) という用語は誤解を招き易いが、つがい基底的想定 (以下baP) グループにとって重要なのは「つがい」そのものではなく、そのつがいによってもたらされる幻想である。Kets de Vries and Miller (1984) はこの種の誤解を避けるため、「ユートピア」というより広義の用語を用いた。baPグループの存続は、これから新しく

生まれるもの、或いは未だ生まれていないリーダー（救世主）に対する希望的な期待を抱き続けることにかかっている。待望される救世主（人間、或いは一つの提案や計画、或いはユートピア等）には、不安と恐怖からグループを救うという期待がかけられている。従ってグループは「繁殖」という目的のために集まっている「かの様に」振る舞う（Hafsi, 1998a）。救世主の創造はつがいとしての（異性、或いは同性同士の）二人のメンバーに託され、グループはこのつがいに注目し期待をかける。従ってbaPグループは他の基底的想定グループとは違い、希望に満ちた期待、幸福感、楽天主義、親しみ、そして穏やかで心地良い雰囲気満たされている。グループにとっては救世主待望自体が目的であって、この目的は決して満たされることはない。何故ならこの希望が満たされるということは、もはやそこに希望がないということの意味するからである。即ち「希望を残存させることによってのみ、希望は存続する」（Bion, 1973; p.146）のである。

いずれの基底的想定グループの特徴からも分かるように、グループは単に一時的な防衛の手段としてそれ等を用いているに過ぎないので、いずれもグループに一時的な満足を与える代わりに更なる不満を引き起こす一面を併せ持った両価的な存在である。従ってグループがある基底的想定に満足し続けることは不可能であり、支配的な基底的想定はしばしば変化し得るものである。但しその期間は特定できるものではなく、「1時間の間に2度3度と変化が現れることもあり、或いは同一の基底的想定が幾月もの間優位にたつこともある」（Bion, 1973; p.148）。本稿で扱ったグループにおける、基底的想定の流れを表すグラフを以下に示す。

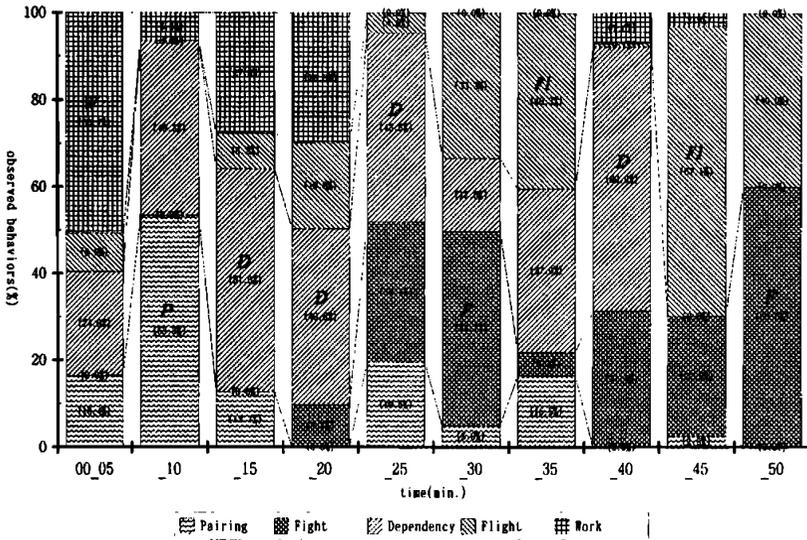


Figure 1. The Relationship between Time and Basic Assumptions Changes

Figure 1.に示したグラフは、グループの基底的想定、および作動の様子を、観察者の採点をもとに数値化し、全体の流れが把握できるようグラフに表したものである。グラフからはグループの基底的想定が不揃いな時間間隔で変化している様子が読みとれる。

Bion (1961) の集団理論は、集団現象を明らかにするためのユニークなモデルを提供し貢献を果たしているが、その文体は非常に簡潔で、具体的な資料の提示や詳細な解説の提供が極端に少ないことでも知られている。そこで今回は特に「作動グループ、およびそれを妨害する基底的想定グループ」という現象に焦点を当て、精神分析志向のT-group (D-group) から得た資料を用いて、その理論と比較しながら論じていきたい。まずD-groupの設定状況について述べておこう。

D-groupを体験したのは心理学実験を受講する16名（男子6名、女子10名）の大学生（当時1回生）である。彼等は自ら受講を希望し、更に成績、志望動機等を考慮の上、選ばれた学生である。

グループセッションは週に1回、連続した2コマの講義（90分間×2）時間を使用して行われた。1コマを1セッションとし、間に休憩を挟んで2セッション、3週間に渡って合計6セッションが実施された。場所は大学内の心理学実験室（窓がなく防音設備の整った部屋）が使用された。

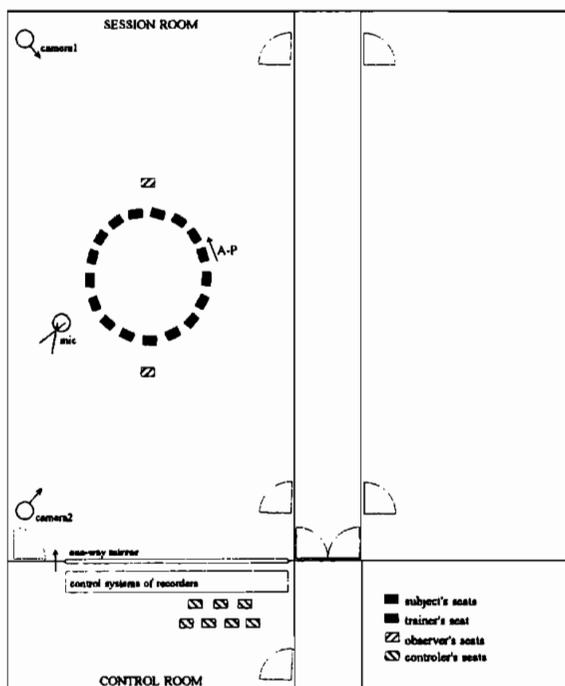


Figure 2. The Design of the Experimental Room

実験室の中央に、円になるように17脚（メンバー用16脚、トレーナー用1脚）の椅子を配置し、背もたれに各メンバーの学籍番号を貼ることによって席を指定した。トレーナーの席は特定のメンバーへの影響を考慮し、2セッション毎に移動したが、メンバーの席は自発的に席替えを行う場合等を除いて、全セッションを同じ席順で行った。メンバーの出席状況は、第1、2セッションにEが、第5セッションにCが欠席したのみであった。メンバー、トレーナーの他に3人の観察者（トレーニングを受けた大学院生）が入室し、円の外に設けられた席でグループの基底的想定及び作動の様子を採点した。セッション内容の記録は観察者によるものの他に、ビデオによる録画が行われ、後にそれをもとにした逐語記録が作成された。各セッションの終了後にトレーナーと観察者の間で、逆転移等の問題についてディスカッションするための時間が設けられた。

まず始めに、トレーナーがグループの目的やルール等について説明を行った。その内容は以下の通りである（Hafsi, 1990）。まずグループの大きな目的は、グループにおいて現れるダイナミクスや心理的現象を体験することであり、そのためにグループとして自由に目標を定め、それに向かって機能、発達することがグループに与えられる基本的作業である。トレーナーの役割はグループに参加し、グループについて何か分かった時にそれを報告することである。最後にグループのルールとして守秘義務、つまりこのグループ体験は一時的なものであり、実験室やグループの在り方、またトレーナーとの関係等はこの場だけの特別なものであることが伝えられた。そして「グループはまず自己紹介から始めてはどうか」という提案と共に、やるのかやらないのか、またその順番等はグループが自由に決めればよい、という内容が合わせて伝えられた。

それではこれから、このグループの作動グループ、及び基底的想定グループのはたらきを、全6セッション（ビデオ録画に失敗した第5セッションを除く）の逐語記録をもとに、セッションの順を追いながらみていくこと

にしよう。

1) 逃避基底的想定グループ

第1セッションの中で作動的な提案の導入が2回試みられたが、いずれもグループはbaFIの特徴を持つような方法によってそれ等処理し、逃避基底的な想定を保持した。では実際にどのようなことが起こったのか、セッションの様子を具体的に述べてみよう。

自己紹介の提案は容易には受け入れられずグループは長い沈黙を保っていたが、1人のメンバーが手を挙げ短い自己紹介を行ったことから、席の順番で同じように短い自己紹介をメンバー全員が行った。それが終わると再びグループは沈黙の空気に支配されていた。このように、作業を遂行することやトレーナーの解釈を受け入れることから逃れるための「沈黙」は、baFIグループにみられる特徴の1つである。

沈黙が続く中でグループに作動的な提案が持ち込まれたが、これに対してグループは、同じくbaFIの特徴を持つ「笑い」や「こそこそ話」という反応によって結局はその提案を妨害し、グループを元の沈黙の状態に戻ってしまった。グループの様子を再現し、このことを例証してみよう。

○：とりあえず何か喋りましょう、グループのことについて話したり、とにかく進みましょう皆さん。

一部：（笑い）

○：何か、出来る話。

K：目的っていうのはこのグループの中での目的ですね。

○：でしょうね。

K：黙っててもこの空気が続くだけだし、とりあえず思ったことは口にしたらいいと思います。

○：そうしましょう。

一部：（笑い）

（沈黙：16秒間）

数人：（小声で笑いながら話す）

（沈黙：1分28秒間）

「何か話そう」という簡単な作業の提案に対しても、グループの反応は何ら現実的な要素を伴うものではなかった。更にその提案を受け入れようとしたメンバーの発言に対しても同じ様な反応をとることによって、彼等にそれ以上の発言を続けることが困難な状況を作り上げていった。

この後グループの沈黙は減少していったのだが、代わりにグループを支配していったのは同じbaFIの特徴を持つ「作業以外のことに没頭」する雰囲気であった。グループの様子を再現し、このことを例証してみよう。

P：（観察者の一人を見て笑いながら）

どうでもいいことなんですけどさっきから気になって仕方がなくて、あの、Lさんとあっちの4回生の人（観察者のこと）が、なんか似てると思って。

多数：（観察者を見ながら笑う）

L：かぶってます？

P：ちょっと兄弟みたいやなあと思って、（観察者に）すいません、失礼なことを。

O：それが目的？

一部：（笑い）

P：それはちゃうけどな、気になって仕方ない。

一部：（笑い）

L：（観察者を見ながら）よう見たら似てるわ。

数人：（笑い、観察者を見る）

(沈黙：1分1秒間)

笑える「ネタ」を探しそれに集中することで作業を忘れるというのは確かにbaFlの持つ特徴である。しかしこの時話題に上った観察者がセッション後語ったように、観察者も、似ていると言われたLも、みんなの笑いにされることに対して「いい気はしなかった」はずである。この時グループは同時に、観察者を敵と認知し、グループ内にスケープゴートを作り出そうとしていたとも考えられる。このような例からも、baFlとbaFは容易に区別することのできない、同じ感情的要素を持った反応の異なる側面であることが理解されるだろう。更にその後のグループの様子をみてみよう。

P：何をしてもいいんだったら、じっとしてるのは嫌なんで、ゲームでもしないですか？

O：まず気軽に話せる雰囲気を作ることが大事やからいいんちゃう？

P：何にしよう？

B：しりとりでいいんちゃう？

O：どこで止めんの？

B：ずっとずっと、2時間ずっと。

一部：（笑い）

グループは結局セッションを終了するまで「しりとり」に熱中していたが、この時のグループには作動グループの持つ特徴である「現実的な時間の認識能力」が全く欠けた状態、つまり基底的理想定に支配された状態であることが理解されるだろう。

2) 闘争基底的理想定グループ

第2セッションにおいて作動的な提案が導入された際、グループはbaF

にみられる特徴、中でも「グループ内の環境に対する攻撃」に集中することでそれを処理しようとした。グループの様子を再現し、このことを例証してみよう。

P：ジャンケンして負けた人が何か自分のことについて言うか、最近あった面白いことを言って、それについてみんなが聞いていくような、どうかなあ。

O：せっかく観察してくれてなのに何もせんかったら悪い。

B：ええんちゃう？

て言うか、暑いじゃん。

P：あ、暑い。

B：ずっとうるさい、何か音してるし。

P：うんうん。

O：暖房？

P：暖房これ？

O：そうやろなあ。

B：半袖でも暑い。

数人：（扇ぐ等、暑そうな仕草）

「せっかく観察してくれてなのに…」という発言の意図するものは、その提案を受け入れているということよりは、観察者（グループ外の人間）に対する皮肉のこもった間接的な攻撃であると理解するべきであろう。突然の実験室（グループ内の環境）に対する不満の表明に対し、作動的な提案をしたはずのメンバーでさえこの話題に合わせているところからも、個人が強力な基底的想定からの圧力を受けていることが推測される。

3) つがい基底的思想グループ

第3セッションの中で、沈黙を続けるグループに対しトレーナーから「グループとして一つの目標を見付けることがグループの目的ではなかったか」という内容の作動的な提案が導入されたが、その後グループが見つけた「目標」は、現実的というよりもむしろbaPの特徴である「曖昧な未来に対する期待」を持つようなものであった。ではグループの様子を再現し、このことを例証してみよう。

E：大学がどうなったら良くなるか何か思ってることがある人は言ってください。

F：私は学部がもっと増えれば、心理学とかすごい人気だから心理学科とかがこの大学にもできればすごい人が来るんじゃないかなっていつも考えてます。

E：社会福祉流行ってて、いろんな大学が一所懸命つくってるのに社会学部があって社会福祉学部がないのもどうかと思いますね。

P：最近社会福祉を強くしていこうという感じだから、つくったらいいと思います。

グループの会話はこの時、発達のためというよりもむしろ理想を語り合うこと自体に集中していると理解するべきである。だからこそグループにはそれ以上何らの進展もみられず、延々と同じ様な内容を繰り返しているのである。堂々巡りの会話に対してしだいに不満を抱き始めながらも、未来に期待を繋ぐということによってのみグループの存続は有り得るのだという無意識的な信念がグループを支配している限り、この状態が続くことになるだろう。

4) 依存基底的想定グループ

第4セッションの中で「一人暮らしについて」という具体的な話題が提供された際、グループはbaDの特徴の中でも「低い自己評価」を主張することによりそれを処理した。ではグループの様子を再現し、このことを例証してみよう。

P：一人暮らしについてどう思いか、1回みんなに訊いてみたいと思うんやけど。

E：この前一人暮らしで風邪ひいてめちゃめちゃ辛かったです。

P：そうですね、僕もこの前の木曜日（第1、2セッションの日）、すごいやばかったです。

E：死んでも気付いてくれへん。

P：そうやなあ。

O：僕は一人暮らしじゃないんですけど、自宅通いやと門限とかあるし、自由な時間が少ないから一人暮らしが羨ましいです。
それなりに大変だっていうのは聞くけど、憧れみたいなのがあります。

E：僕逆ですね、実家では門限もなくて、一人暮らし始めてから振り込まなあかんとか余計制約付いて動けへんから。
大変やで。

P：大変やね。

この時のグループの会話をよく吟味すれば、メンバー間に相互作用が乏しく、むしろ各メンバーがそれぞれ自分自身について個人的に、上述したような「低い自己評価」を主張している様子が読みとれるだろう。

更にグループの話題は「独り言について」へと移行していったが、ここでは同じくbaDの特徴である「自分自身は無力で助けを必要とする存在で

あり、それなしでは機能することができない」というような主張がみられたので、それを再現してみよう。

P：一人暮らしすると独り言多くないですか？

O：自宅でも多いですよ。

僕受験の時塾で友達できなくて一人で悶々とやってたんで喋る相手いなくて、無性に独り言が増えて、もう辛いですね。

更に一人暮らしについての話題が続き、baDグループに必要な「依存される人」を求める声上がるが、誰もが自分は「依存する人」の側であるという無意識的な信念を抱いているため、その提案は受け入れられなかった。グループの様子を再現し、このことを例証してみよう。

K：やっぱり一人暮らしするとしっかりしてきますか？

E：全然、飯も作らんし、結局何もせん。

P：一人暮らしする前はしてみたいと思ってたけど、してみるとやっぱり大変、今まで親がやってくれたことを自分で全部せなあかんし。

E：洗濯があんなに大変だとは思わなかったね。

P：うんうん。

E：飯炊くのも、何もかもが。

P：はいはい、うんうん。

E：実家に帰って、どれ程楽か味わってみたい。

臨床的な視点からは、一人暮らしをしていても実は何もできないのであり、実家に依存したいのだという主張をすることによって、「依存される」存在をグループ外に作ろうとしているという内容が理解されるだろう。

このとき、セッション中には「一人暮らしについて」という提案に対して、「グループ全体を意識した現実的な話題の提供」、つまり作動的提案であると理解したが、セッションがこのような状態で終了したとき初めて、実はこの提案はグループにbaDを持ち込む意図を持ったものであり、グループもそれを受け入れたのだという考察が可能となる。Bionは同じ様な自身の経験に触れ、「このジレンマから抜け出す唯一の方法は、自分自身が参加したある委員会や他の集会の記録を思い出し、私が作動グループとよんだものの存在をどの程度証明することができるか考察してみることであり」(1973; p.140)と述べている。

6) 依存基底的想定 (の二面性) グループ

第6セッションの主なテーマは、「もうすぐ始まる学祭について話す」ことだった。しばらくの間は、自分の所属するサークルの出し物を紹介する等、現実への接触が感じられるような内容の会話が続いたが、やがて沈黙が訪れた。その後「将来やりたいことはあるか」という話題の提供があった。「将来」に関する話題はどちらかと言えばbaPの領域であるが、この場合は提案をしたメンバーの、「自分には何もやりたいことがない」という主張とその後のグループの展開から、baDの現れであると判断された。メンバーの「学校の先生になりたかったのだが、この学部では教員免許が取れない」という発言に対してグループがとった反応は、baDの二面性の特徴を示すようなものであった。その様子を再現し、このことを例証してみよう。

P：文学部は受からなかったん？

あそこなら資格が取れるし。

B：なんでここなん？

E：それはどうするんですか？

- O：どうしよう（笑い）。
- C：カウンセラーとかになったら？
そしたら子供ともいける。
- F：そういうのは好きじゃないですか？
- O：はい。

複数のメンバーから様々なアドバイスを一方的に与えられ、発言したメンバー自身が困惑している様子を読みとれる。このように、「何もできない人」を作り出した上でその面倒をみてあげるとというのが、baDの二面性といわれる側面が持つ特徴である。

考 察

本稿の目的は、D-groupをBionの集団理論に基づいて検討し、臨床的資料を用いることによって、彼の集団理論の中核を成す「作動グループ」及び「基底的理想グループ」理論をより明確なものにすることであった。そのために、1グループをセッションの順に追いながら、作動グループと基底的理想グループとの相互作用、すなわち作動グループはいかにして基底的理想グループに妨害されたのか、ということについて、特徴的な臨床的場面と共に論じてきた。その結果、今回資料として用いたグループについては、全6セッションを通じて、作動的提案を受け入れる、つまり作動グループとして「発達」というのは状況がほとんどみられなかった。セッションの中でトレーナーやグループメンバーによって持ち込まれた作動的な提案は、全てグループの様々な基底的理想によって妨害され、それ以上の進展はみられなかった。このことから、グループにとって作動的な提案を受け入れ発達するということがいかに困難であるかが推察される。

Bion (1961) によれば新しい（作動的な）観念に脅威を感じた基底的理想グループがとる反応の仕方は2種類あり、1つはその観念を受け入れ

作動グループとして発達していくというもの、そしてもう1つは基底的想定グループとしてその観念に反発するというものである。例えば今回資料として用いたグループの反応は全て後者に属するものである。新しい観念は発達の要素を伴い、作動グループのみが発達の要素を受け入れる能力を持つことからこの理論は成り立っているが、グループは同じ基底的想定を保持するためにもっと複雑な方法を用いる場合があり、それをBionは変則形態 (aberrant forms) と名付けた。この方法を用いるグループは、一見その新しい観念に影響され変わろうとしているかのようにみえるのだが、実はそれは基底的想定の下にある複雑な反応の仕方であり、後になって考えてみればグループの状態は何ら変わっていなかったというような反応である。変則形態はそのとき支配的な基底的想定に応じて異なる3種類の型を持つ。ではそのような複雑な反応をグループにとらせる要因は何であるのか、つまりその新しい観念、およびそのときのグループの状態はどのようなものなのだろうか。それ等のことはBion自身によってもほとんど言及されていない。実際、変則形態は、基底的想定や作動グループに関する理論に比べても、明確にされていない部分の非常に多い概念である。グループの変化と停滞の間にあるような、曖昧ではあるが重要と思われるこの概念についてはこれから研究が進められる必要があるだろう。

(付記)

本稿を執筆するに当たり、貴重なご意見、またご指導をいただきました、奈良大学社会学部 Mohamed HAFSI 助教授に、心から感謝いたします。

参考文献

- Armeliuș, K., & Armeliuș, B. A. 1982. *Work and emotionality in small groups working with probabilistic inference tasks* (Report No.7). Umea, Sweden: University of Umea.
- Bion, W. R., 1961. *Experiences in groups and other papers*. New York: Basic Books.
- 池田敦好／訳 (1973) 『集団精神療法の基礎』岩崎学術出版社
- Freud, S., 1921. *Group psychology and the analysis of the ego*. London: Hogarth Press.
- 井村恒郎・小此木啓吾他／訳 (1970) 「集団心理学と自我の分析」『フロイド著作集 第6巻』人文書院
- Grinberg, L., Sor, D., Tabak de Bianchedi, E., 1977. *Introduction to work of Bion*. trans. A. Hahu. Scotland: Clunie Press.
- 高橋哲郎／訳 (1982) 『ビオン入門』岩崎学術出版社
- Hafsi, M., 1990. The leadership function in training groups: A psychoanalytical approach to group dynamics. *Psychologia*, 33, 230-241.
- Hafsi, M., 1998. The Group Valency Constitution, the Dominant Basic Assumption, and the Scapegoating Phenomenon. *Memoirs of Nara University*, 26, 135-149.
- Hafsi, M., 1998a. Beyond Group and Irrationality: Bion's Contribution to the Understanding of the Group.
- Kets de Vries, & Miller, D., 1984. *The Neurotic Organization: Diagnosing and Revitalizing Companies*. New York: Harper Business.
- Klein, M., 1955. Notes on some schizoid mechanisms. In *Developments in Psychoanalysis*. London: Hogarth Press.
- Stock, D., & Thelen, H. (1958). Emotional dynamics and group culture. Washington DC: National Training Laboratories.